



Title	日本語の「シオウル」と中国語の「完」について
Author(s)	張, 麗華
Citation	語文. 1985, 46, p. 22-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68737
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語の「シオワル」と中国語の「完」について

張麗華

一、はじめに

日本語には「シオワル」^(注1)という動作・作用の終了を表す複合動詞があるが、中国語にも形式も意味もそれに似た「完」^(注2)の表現がある。日本語の「シオワル」は、『日本語教育事典』では、終結^(注3)相というアスペクトを表すものとされているのに対して、中国語の「完」は、動作・作用の終結を表すと説明する学者が見られる。両者がこのようによく似ている一面があるため、中国の日本語学習者は、「シオワル」は「完」に相当する表現だと理解してしまい、また逆に、日本の中国語学習者は、「完」は「シオワル」に当る表現だと考えてしまう傾向があるように思われる。はたして両者は同じであろうか。本稿は一つの試みとして、両表現形式の特徴について考察を試みることにする。

なお、研究資料として、主に日中両語の小説及びその訳を利用するが、適当な用例がない場合は自分で作例する。また用例を引用する時は略号（作品名の最初の二字）を用いることにする。

二、「シオワル」について

二一、従来の研究

「シオワル」の意味や用法だけについて論じた論文はいままでないが、それに触れたところのある文献としては、つぎの三つが挙げられる。

(1) 国広哲弥編『ことばの意味』^(注5) (1982)

この本には、類義語の研究として、複合動詞「アゲル・キル・オエル・オワル」の項目があがっている(78~86ページ)。「オエル」と「オワル」については、「動作の終了」を表すと説明し、さらにその特徴として、「予定の行為」の終了を表す、と指摘し、「したがって自然現象のA終了Vについては用いられない」と解釈している。

(2) 日本語教育学会編『日本語教育事典』^(注6) (1982)

前記の本とはほとんど同じ記述をしているが、最初の説明を引用し
ておくと、つぎの通りである。

「継続動詞に付いて、終了の意を表すが、その終了は予想されているという感じを伴う。人の関与し得ないような自然発生

の現象には用いられない。」(372ページ)

(3) 森山卓郎「動詞のアスペクチュアルな素性について」(注¹) (1988)
氏はこの論文で、動詞のアスペクチュアルな素性の一つとして、

「終結性」という概念を提出している。そして、その表現形式として「オウル」を挙げ、終結性という観点から述べているが、氏は、動詞を、最初から動きの全体量が決まっているかどうかによって、終結動詞と非終結動詞とに分け、そして、非終結動詞でも、全体量が規定された条件の下で「シオウル」などと承接する、と論じている。

以上挙げた三つの文献では、(1)と(2)は、「シオウル」そのものの意味と用法を解釈するものであるのに対して、(3)は、終結を表すアスペクト形式の一つとしての「シオウル」を用いて、動詞のアスペクチュアルな素性を明らかにしようとするものである。

このように、従来の研究によって、「シオウル」は継続動詞につき、予定の行為の終了を表し、しかも、その行為は動きの全体量限定ができるものだ、ということが明らかにになった。が、実際「シオウル」は、継続動詞だけでなく、「全員乗りオウル」のような表現が成立するように、瞬間的な動作を表す動詞の後につくことも可能であり、また「笑いオウル」のように動きの量が限定できず、予定の行為ともいいきれない動詞の後に結びついて用いられることもあるのである。

そこで、筆者は従来の研究をふまえた上で、「シオウル」の特徴について、以下二つの仮説を立てて考察を進めたいと思う。

(1) 「シオウル」は動きの表現として、動作・作用の終了を表すのではなからうか。

(2) 「シオウル」の表す終了には、動きの量がなくなることによる動作・作用の終了と動作主の意志による動作・作用の終了、という二種類のものがあるのであるのではなからうか。

二―二、動詞の動作性と「シオウル」との関係

動作・作用を表す動詞の中には「シオウル」と結びつくものとそうでないものがあるが、それはまずその動詞で表される動作・作用が動作性を伴うかどうかと関係があるように思われる。ここで言う動作性を伴うとは、状態的な表現ではなく、動作・作用を動きととらえる表現のことである。継続動詞も瞬間動詞も同じことが言える。まずつぎの表を見てみよう。

〈表1〉 動詞の動作性と「シオウル」との関係

	「シオウル」と 結びつくもの	「シオウル」と 結びつかないもの
継続 動詞	書く↓書きオウル 読む↓読みオウル	過こす↓※過こしオウル 飼う↓※飼いオウル
瞬間 動詞	乗る↓(全員)乗りオウル 下校する↓ (全員)下校しオウル	行く↓※行きオウル 来る↓※来オウル

注 ※は不適当であることを表す。以下同じ。

表の中に出てくる動詞は、いずれも人間の動作・作用を表すにもかかわらず、「シオウル」と結びつくものとそうでないものとに分かれるが、それは動作性を伴うものなのかどうかの違いによると思われる。例えば、継続動詞の「書く」と「過こす」とでは、「原稿を書きオウル」のように「書きオウル」という表現ができるのに対して、「夏休みを過こしオウル」とは言わず、つまり「過こしオウ

ル」という表現はできないが、それは、「書く」という動詞で表されるのが動きを含んだ動作であるのに対して、「過ぐす」で表されるのは一種の状態だからである。動きをとらえることができないため、「シオワル」と結びつかないこの類の継続動詞として、ほかに「飼う」、「暮す」、「住む」などのものが挙げられる。

瞬間動詞の場合も同じである。例えば、「乗る」、「下校する」のような動詞は「全員乗りオワル」、「全員下校しオワル」のように用いることができるが、それは「乗る」、「下校する」というような動詞で表されるのが動きととらえられる動作だからである。もし「乗る」、「下校する」のかわりに「行く」、「来る」のような動作性の弱い動詞にすると、「全員行きオワル」、「全員来オワル」のように言えなくなるであろう。ただ瞬間的な動きを表す動詞の場合、普通動きの全体量限定が必要だが、それについてはつぎの段で述べることにする。

二一三、動きの量限定と「シオワル」との関係

森山氏は前記論文で動詞の終結性を論じる時、終結性と動きの量限定との関係について、つぎのように述べている。

「終結性があるためには終結点がないわけではないわけであるが、このことは、言葉を変えていえば、動きの全体量が決まっているということである。」(12ページ)

筆者は、基本的にはこの説に賛成するが、しかし、「笑いオワル」のような、動きの全体量が定まらない表現でも「シオワル」が用いられることがあることを考えると、動詞の性質と量限定との関係についてさらに検討する余地があるように思われる。それについては、

筆者はつぎのように考える。

- (1) 無意志動詞と瞬間的な動きを表す意志動詞は、「シオワル」と結びついて用いられる時、動きの全体量限定が前提になっている。

- (2) 継続的な動きを表す意志動詞は、「シオワル」と結びついて用いられる時、動きの量が限定されている場合とそうでない場合とがある。

まず(1)の用法について、用例を見ながら考えてみる。

- ① 薬が溶け終わったら、別の液を加えよう。(『日本語教育事典』372ページ)

- ② ベルが鳴り終わってから、部屋を出た。(同右)

①の文の中に「溶けオワル」という表現が出ているが、「溶ける」という動詞に「シオワル」がついて「溶けオワル」が用いられているのは、「溶ける」という動きの量が限定の「薬」によって初めて決まっているためである。また②の文の中には「鳴りオワル」という表現が用いられているが、「ベルが鳴りオワル」が言えるのは、普通ベルの鳴る時間が限定されており、「鳴る」という動きの量がそれによって決まっているからである。自然現象を表す無意志動詞の中で、「降る」、「吹く」、「揺れる」、「動く」などのものはいずれも「シオワル」と結びつきにくい、その理由はそれらの動詞で表される動きの量というものが限定しにくいことにあるのではないかと考えられる。

つぎに瞬間的な動きを表す意志動詞について考えてみたいと思う。

- ③ 乗客が全員乗りオエル(オワル)とバスはすぐ発車した。

(『ことばの意味』3 85ページ)

「全員乗りオエル（オワル）」の中の動詞、「乗る」は意志動詞だが、瞬間的な動きを表すもので、この文脈において「シオワル」と結びついて用いられているのは、全員乗るという限定されている繰り返しの動作を表すからである。もしそれをつぎのように言い換えれば、「乗りオエル（オワル）」は使えなくなるであらう。

a? 太郎が乗りオエル（オワル）とバスはすぐ発車した。

b? 何人かが乗りオエル（オワル）とバスはすぐ発車した。

aの文が不自然なのは、主語が単数の人間であるため、「乗る」で表されるのが瞬間的な動作になり、動きの量というものがとらえられないからである。またbの文が言えないのは、それで表されているのは繰り返しの動作だが、その全体量が限定されていないためである。このように、瞬間的な動きを表す動詞が「シオワル」と結びついて用いられる時は、動きの全体量が限定が前提になっていなければならない。

以上、無意志動詞と瞬間的な動きを表す意志動詞が「シオワル」と結びつく場合、動きの全体量が限定を前提とすることについて述べてきたが、それは、両者で表される動きの量がいずれも動作主の意志と直接かわらないからである。無意志動詞はもとより、瞬間的な動きを表す意志動詞も後に「シオワル」をつけて用いる時、複数の人間によって動きの全体量が限定されるため、一人一人の動作主の意志とは直接関係がない。両者で表される動きの終了はすなわち動きの量がなくなることであるため、両者が「シオワル」と結びつく時は、動きの全体量が限定が必要になる、と考えられよう。

つぎに継続的な動作を表す意志動詞が「シオワル」と結びついて用いられる時、動きの量限定との関係について考えてみることにす

るが、この類の動詞は、動きの量が限定されている動作・作用の終了を表すものと、動作主の意志によって必要な程度まで行なわれたと思う動作・作用を終えることを表すものとに分けることができると思う。

まず前者の意味で用いられる用例を見てみよう。

④ その瞬間、生徒たちは全身に火傷をしたが、引率教官は生徒一同に「海ゆかば……」の歌をピアノシモで合唱させ、歌い終ったところで「解散」を命じ、教官は卒先して折から満潮の川に身を投げた。（黒い・5）

⑤ 鏡史郎は大勢の人の間にはさまって、横断歩道を横切った。途中から周囲の人の動きが早くなったので、鏡史郎も半ば駆けけるようにした。が、道を渡り終えたところで、（夜の・42）
⑥ 書類を書き終って読み返していると、工場の機械の音がびたりと止まった。（黒い・304）

この三つの文脈における動詞、「歌う」、「渡る」、「書く」で表される動きの量は、それぞれ「歌」、「道」、「書類」の量によって限定されており、「歌いオワル」、「渡りオエル」、「書きオワル」で表されているのは、その限定されている動きの量がなくなることである。継続的な動きを表す意志動詞で、「シオワル」と結びつく時、この意味で用いられるものは非常に多い。例えば、「論文を読みオワル」、「宿題をやりオワル」、「映画を見オワル」などの表現の中の「読みオワル」、「やりオワル」、「見オワル」はみなこの類に入る。

一方、動きの量限定ができない動詞で、「シオワル」と結びついて用いられるものもある。例えば、

⑦ 拝み終ってからのオオヨン婆は……。 （海暗・299）

⑧ 突然妙子は腹を押えて笑い出した。妙子が笑い終るまで、植はじっと待っていた。(背徳・148)

「拌む」、「笑う」のような動詞は、初めから動きの全体量が決まっているわけではない。もし前者の「シオワル」の意味を「終わりまでしする」、「全部しする」と解釈することができるとすれば、後者の「シオワル」はこの解釈では説明できない。そのかわりに「ししているのを終わる」とでも解釈できよう。つまりこの「シオワル」で表されているのは、動きの量がなくなることではなく、動作主の意志によって、必要な程度まで行なったと思う動作・作用を終えることである。大阪大学(豊中キャンパス)図書館の二階の閲覧室の書架にとどこころ

「読み終った図書は必ず返却」

と書いてあるが、この場合の「読みオワル」で表されているのもその意味であろう。

以上述べてきた「シオワル」の意味と動詞の性質との関係を表にまとめると、つぎのようになる。

△表2V 「シオワル」の意味と動詞の性質との関係

「シオワル」の意味		動詞の性質		語例	
動きの量がなくなることに よる動作・作用の終了を表す	意志動詞	継続動詞	(論文を書きオワル)	瞬間動詞	※買いオワル
		瞬間動詞	(全員)乗りオワル		
	無意志動詞	継続動詞	(葉が)溶けオワル	瞬間動詞	※落ちオワル
		瞬間動詞			
動作主の意志による動作・作用の終了を表す	意志動詞	継続動詞	笑いオワル	瞬間動詞	
		瞬間動詞			

三、「完」について

三―一、従来の研究

中国語の「完」はいままでほとんど研究されていないと言っている。中国語の文法書や教科書では、それを動作・作用の結果を表すものとし、あまり問題にしなかったが、木村英樹氏(注8)はそれをアスペクト形式——「了 le」へした、^(注9)「着 zhe」へしている、^(注10)「起来 qilai」へ始める、^(注11)「下去 xiaqu」へ続ける、^(注12)「完 wan」へ終わる、^(注13)「過 guo」へたことがある——の一つとして考えている。氏は「完」などをアスペクトを表すものと主張し、従来結果補語と言われているものを新しい観点からとらえているのである。

「完」については、氏は、

「始動の『起来』と継続の『下去』と終結の『完』」

というふうに並べて論じているように、動作・作用の終結を表すものとしてとらえているが、その論文で「完」についての詳しい議論はしていない。中国語の「完」は日本語の「シオワル」と同じ性質のものだろうか、筆者はここで「シオワル」と対照しながら、「完」の性質を明らかにしようとする。^(注14)

三―二、「完」の意味と用法

「シオワル」と同じように、「完」もつく動詞には制限があるが、基本的には「シオワル」に似ているので、ここでは紙数の関係でそれに触れないことにする。以下「完」の意味と用法を中心に述べていきたいが、それについては、筆者は大きく三つに分けて考えられるのではないかと思う。

(1) 動作・作用の終了を表す。

この意味で用いられる場合は「シオワル」に相当し、二種類のものが見られる。

a 動きの全体量が定まっている場合、動きの量がなくなること

によって、動作・作用が終了することを表す。例えば、

⑨ 読完了、成岡伸了伸腰、站起来、倒杯開水喝了。(紅岩・87)

訳、読み終わってひとつ伸びをすると、立ち上がったって湯を飲んだ。

(71)

⑩ 数完、放在了悶葫芦罐儿里。(駱駝・82)

訳、数えおわって貯金玉に入れた。(142)

b 動作主の意志によって持続している動作・作用を終えること

を表す。例えば、

⑪ 哭完、她抹着泪对祥子說、(駱駝・153)

訳、泣きおわって、涙を拭きながら言った。(270)

「哭完」の中の「完」は、用例⑨⑩の中の「読完」、「数完」の「完」

と異なり、「終わりまでする」、「全部する」というような意味

を表すのではなく、「しているのを終わる」意を表しているの

である。

(2) 動作・作用の完了を表す。

まずつぎの用例を見てみよう。

⑫ 「……！還不快洗洗哪？洗完好上点药、真！」(駱駝・63)

訳、「……！さ。なにをぐずぐずしているの。はやく洗って薬を

つけなくちゃ。さ、はやく！」(ⅢⅠⅢ)

この文では、中国語は「完」が用いられているのに対して、日本語は「シオワル」が用いられていない。「洗完」の訳は「洗って」

になっているが、中国語の文をよく読んでみると、文中に同じ動詞が二回用いられていることに気がつく。つまり「洗完」の前に「洗洗」の重複した形のもので、ここでは軽い命令を表す」という動詞が出てくるのである。この「洗洗」の「完」は「終わりまでする」、「全部する」、または「しているのを終わる」というような意味を表しているものではないことは明らかだが、この二回出てくる動詞の担う役割については、つぎのように考えられるのではないかと思う。

a 一回目の動詞

洗洗、動作だけを表す。

b 二回目の動詞

洗、「完」と連接して動作の完了を表す。

ここで一回目の動詞、「洗洗」は動作だけを表すと解釈したのは、その表される意味の中に動作の完了を含んでいないからである。そのテストとして、もしつぎに出てくる「洗完好(この「好」は助動詞で、つぎにくる動作がその前にくる動作の目的であることを表す^(注12))」を取ってしまえば、その「洗洗」と後に出てくる動詞「上(薬)」との関係がどうなるかを検証する方法が考えられるが、それらを括弧の中に入れてみよう。

「……！還不快洗洗哪？(洗完好) 上点药、真！」

このように、「洗完好」を取ってしまおうと、「洗洗」という動作が行なわれた後、つぎの「上(药)」という動作が行なわれる、という意味ははっきりしない。もしそれを表そうとすれば、このままでは不適切である。このテストから、一回目の動詞は動作だけを表す、ということができよう。

つぎに、二回目の動詞に「完」がついた時の意味について考えてみたいが、まずこの文の文脈を見てみよう。「洗洗」の前に「快(はやく)」という副詞があるが、このことから、この場合の「洗洗」は時間的余裕を持たない動作であることが分かる。その急いでほしい理由は、つぎにくる「上(葯)」という動作が短かい時間内に行なわれなければならないからである。このような要素を考慮に入れた場合、もしこの文を日本語に直訳する(同じ動詞を二回使って)と、「シオワル」の表現が適切かどうかを見てみよう。

a' 「……さ、なにをぐずぐずしているの。はやく洗いなさい。洗って薬をつけなくちゃ。さ、はやくー」

a' 「……さ、なにをぐずぐずしているの。はやく洗いなさい。洗いオワッタ薬をつけなくちゃ。さ、はやくー」

この二つの訳では、a'よりもaの方が適当であろう。「洗って」のかわりに「洗いオワッタ」を使うと、「洗う」という動作の終了を強調することになるため、この文脈においては不適切であろう。この日本語訳からも「洗完」の中の「完」は動作の終了を表すものではないことが分かる。その前にくる動詞「洗洗」が動作しか表さないため、つぎにくる「洗洗」でその動作が完了することを表す、という説明が考えられよう。

(3) 事柄がすむ、または終わることを表す。

「完」にはまたつぎのような用法もある。

⑬ 開完了会、我就去食堂吃饭。／会議がすんだら、食堂へご飯を食べに行く。(『實用現代漢語語法』336ページ 斜線の後の訳は筆者による。以下同じ。)

⑭ 開完了會、董桂花同幾個婦女回家去、(太陽・84)

訳、会議が終わると、董桂花は何人かの女と家路についた。(73)

この二つの文の中の「開完了会」は、「開会」という連語の間に「完了」(この「了」は完了を表す語である)がはさまれた形になっているが、中国語の「開会」は「会議を開く」という意味のほかに、「会議に出る」その事柄を表すことがある。つまりこの場合の動詞「開」は「開く」という動作を表すのではなく、「開会」で「会議に出席すること」を表しているのである。中国語では「他正在開會」のような表現がよく使われるが、この場合の「正在開會」(会議中という意)は、「開」という動作が進行中であることを表すのではなく、動作主が会議に出席していることを表しているのである。用例⑬⑭の中の「開完了会」の「開完」も、「開」という動作と「完」とがつながりを持っているわけではなく、「開会」という事柄がすむ、または終わることを表すのに「完」が用いられているのである、と考えられよう。

中国語の「完」はこの意味で用いられる場合が少なくない。例えば、日本語の「食事をする」、「買物をする」というような表現に対して、中国語は普通の会話において、「吃飯」、「買東西」という連語を用いるが、「吃完饭」、「買完東西」で、食事がすむ、買物がすむ、という意味を表すことが多い。例えば、

⑮ 飯が済むと下女は臺所へ下る。(三四・49)

訳、吃完饭、女仆到厨房去了、(51)

⑯ 太郎は買物がすむと、家へ帰った。／太郎買完東西就回家了。以上まとめた「完」の三つの意味と用法を表にすると、つぎのようになる。

△表3V 「完」の意味と用法

意味と用法	語 例	日本語に 相当する意味	「シオワル」との 対照
動作・作用 の終了を表 す	動きの量が なくなるこ とによる終 了 動作主の意 志による終 了	写完(論文) (論文を)書きオワル 終わりまでゝする 全部ゝする ゝしてゐるのを終 わる ゝしてゐるのを終 わる	「シオワル」と 対応する
動作・作用の完了を表す	洗完(手吃飯) (手を)洗って(食事する)	〈文中にくる場合〉 ゝしてゝ ゝしたら ゝすると	「シオワル」と 対応しない
事柄がすむ、または終わ ることを表す	開完会 会議がすむ	ゝがすむ ゝが終わる	

四、両者が対応しない原因について

「完」が「シオワル」と対応しない意味や用法もあるのは、中国語の動詞が一定の文脈において動作しか表さない性質を持っていることや日中両語の文法体系の相違などによるのではないかと思う。

四一、中国語の動詞の表す意味範囲との関係

日本語の「シオワル」が動作・作用の終了を表すのに対して、中国語の「完」は動作・作用の完了を表す場合などにも用いられることは、中国語の動詞が一定の文脈において動作しか表さないことがある、という点と関係がある。「完」が用いられる文の中に同じ動

詞が二回用いられているものが少なくないが、同じ動詞を繰り返して用いるのは、一回目の動詞で表されるのが動作だけで、その中に動作の完了を含まないからである。「シオワル」の訳になっていない「完」の用例をいくつか見てみよう。

①⑦ 「童児」急忙通過黃棉紙、大仙在香苗上抓了几抓、而后沾着吐沫在紙上画。画完符、她又結結巴巴的説了几句、(駱駝・179)

訳、「侍童」がいそいで黄色い薄紙をさしだすと、仙人は香の上に手をかざし、その手に唾をつけてなにやら書いた。お札を書くと、彼女

はまたどもりながらしばらく話した。(312)

①⑧ 「放開！我自己会走！」成崗猛喝了一声、転過頭、对着許云峰朗説道、「老許、我先走一步。」説完便拖着沉重的鉄鎖、昂然走過徐鵬飛面前、徑直朝門外走去。(紅岩・174)

訳、「離せ！自分で歩ける！」一喝した成崗は許雲峰を振返って、「許さん、お先にまいります」と明るくいうと、昂然と頭をあげ、出口へ向かって徐鵬飛のまえを通りすぎた。(133)

①⑨ 作得了飯、她独自在厨房里吃、吃完、她喊了声祥子、(駱駝・192)

訳、支度ができると、台所でひとりできささとすませ、祥子に声をかけた。(334)

②〇「你馬上看、看完就還我、明天我要還他。」(野火・34)

訳、「太急ぎで読んで返してね。明日彼に返さなければならぬんだから」(30)

以上挙げた四つの用例の中にいずれも同じ動詞が二回用いられている。①は「画」、②は「画完」、③は「說道」(註13)、④は「吃」、⑤は「吃」(註13)、⑥は「看」、⑦は「看完」、というふうになっているが、これらの文においてはどれも二回目の動詞に「完」がついた表現を省略することとできない。もしそれらを取ってしまふと、文の前後関係がそれぞれつぎのようになるが、どれも不適切である。

? ……沾着吐沫在紙上画。(画完符、)她又結結巴巴的說了幾句
? ……、對着許云峰朗聲說道、「……。」(說完)便拖着沉重的
鐵鍊、……。

? ……、她独自在厨房里吃、(吃完、)她喊了声祥子、
? 「你馬上看、(看完)就還我、……。」

「完」の表現がなければ、「画」、「說道」、「吃」、「看」のつぎにくる動作はそれぞれ前の動作が完了した後に行なわれる、ということとはつきりしない。前の動詞は動作しか表示していないのである。

中国語のこのような文には特徴が見られる。ここに挙げた四つの用例を見ても分かるだろうと思うが、まず、これらの文では一回目の動詞を用いている表現は動作主がある動作を行なう場面を具体的に描写するものが多いということである。例えば用例⑦⑧⑨をもう一度見てみよう。

△ 沾着吐沫在紙上画 (その手に唾をつけてなにやら書いた)

△ 転過頭、對着許云峰朗聲說道 (許雲峰を振り返って、「……。」と明るくいうと)

△ 她独自在厨房里吃 (台所でひとりでさっさとすませ)

それから、この類の文には命令文も多いということも挙げられる。例えば用例②③がそうである。

△ 「你馬上看……。」(太急ぎで読んで……)

また前に出た用例②も同じである。

△ 「……!還不快洗洗哪?……。」(「……!なにをぐずぐずして
いるの。はやく洗って……」)

以上述べてきた二種類の文の中に同じ動詞を二回用いて「完」の表現を用いているものは多いように思われる。が、それらに対する日本語訳は「シオワル」になつていないものが少なくない。

四一、日中両語の文法体系の相違

日中両語の文法体系の違いも「完」が「シオワル」と対応しないことと関係する。ある動作をしてから、つぎの動作に移ることを表す場合、日本語では、動詞に接続助詞「て」、「テカラ」、「ト」、「タラ」などをつけた形で、最初の動作を表すことができるが、そのような表現形式は中国語にはない。動作が継続的に行なわれることを表す表現形式としても、「完」が用いられているのである。例えば、つぎのような用例を見てみよう。

②〇 祥子准知道自己不在吃完就滾之列、可是他愿意和大家一块吃。

訳、祥子は、自分が別格のことを心得ていたが、みんなといっしょに食べたいと思った。はやく飯をすませて仕事にかかりたかつたし、仲間つきあいもあるからと思つていたのである。

② 祥子一辺吃、一辺把被兵拉去的事説了一遍。「哼、你這個傻小子！」劉四爺聽完、搖了搖頭。(駱駝・36)

訳、祥子はご馳走になりながら、兵隊につれさられた顛末を話した。「ちえっ、どしなやつだ！」すっかり聞いてから、親方は首を振った。(62)

③ 「祥子―就那辦麼啦！二十七見！」她朝着祥子的寬直的脊背説。説完、她瞪了白塔一眼、吸了口氣、向西走去。(駱駝・81)

訳、「祥子、いいね、二十七日だよ！」彼女は祥子のびんとのびた背中へそう呼びかけると、白塔をちらりと見、溜息をひとつついて西のほうへ歩きだした。(141)

④ 況且、吃完就得走、還不許拉出車去、大年底下的。(駱駝・122)

訳、しかも、この年の瀬に、食ったらでてゆけ、車を引くことはいっさいまかりならぬとはなんだ、と。(216)

この四つの文に出てくる「完」に対して、日本語訳はそれぞれ「シテ」、「シテカラ」、「スルト」、「シタラ」の表現形式になっているが、「完」はこのような文脈にも用いられている。つまり中国語の「完」は、以上挙げたような、日本語の接続助詞の役割まで果しているのである。日本語では、動詞の後に特定の接続助詞をつけなければならない。中国語になると、「完」などの表現を必要とすることが少なくない。例えば、つぎのような日本語の文に対して、中国語では「完」が用いられるのである。

日 太郎は図書館で、宿題をやつて、レポートを書い^て、資料を調べ^てカラ、家へ帰った。

中 太郎在図書館做完作業、写完報告、查完資料、然后才回家。

動作が継起的に行なわれることを表す表現形式は「完」以外にもあるが、「完」が「シオワル」と異なり、特に動作・作用の終了を強調する必要のない場合でも用いられる原因を考へるには、日中両語のこのような文法体系の相違を明らかにすることも必要であろう。

五、おわりに

本稿では、アスペクトに関する日中両語の対照研究の一試みとして「シオワル」と「完」を扱ってみた。これで、従来動詞の表す動作の展開の様相の一つとして終結を表す表現形式だといわれている日本語の「シオワル」と中国語の「完」の性質がいくらか明らかになったのではないかと思う。筆者の力不足でまだ十分説明できなかったところも多いかと存じますが、中国の日本語学習者、または日本の中国語学習者の参考ともなれば幸いである。

〔付記〕

本稿は筆者の修士論文の一部をもとにしてまとめたものだが、宮地裕先生、森山卓郎助手など多くの方々の懇切な御指導を仰ぐことができ、ここに記して厚く御礼を申し上げます。

〔注〕

① 「シオエル」も同じ形式のもので、一緒に扱うことにするが、「シオワル」と「シオエル」の使い分けについては、まだ分からないところがあるので、本稿ではそれを問題にしない。

② 「日本語教育事典」(一九八二、日本語教育学会編 大修館書店)に見

られる用語である。三七二ページ（姫野昌子担当）。

③ 前掲『日本語教育事典』、一八九六ページ（吉川武時担当）。

④ 木村英樹「中国語」（一九八二）『講座日本語学11』、明治書院）三五ページ。

⑤ 平凡社、七八一八六ページ。

⑥ 同注②。

⑦ 『待兼山論叢』第十七号、十二、十五ページ。

⑧ 例えは、香坂順一著『現代中国語文法』（一九六二）、一〇一ページ。

伊地智善雄編『簡明基礎中国語』（一九七九、東方書店）、一一一ページ。

劉月華・潘文娛・故韓著『實用現代漢語語法』（一九八三、外語教学与研究出版社）、三三二ページ。

⑨ 同注④。

⑩ 同注④二五ページ。活字の關係で一部の中国語の簡体字は日本漢字体に直した。以下同じ。

⑪ 動詞の後につく「完」には「なくなる、消滅する」の意を表すものもあるが、その場合の「完」は結果補語と考え、考察の対象から除外する。

⑫ 『現代漢語八百詞』（呂叔湘主編、一九八一、商務印書館）の説明による。二二七ページ。

⑬ この「說道」は、「説」と同じ意味を表し、話す内容を直接引用する場合に用いられる。

⑭ 例えは「了」などが挙げられる。

〔用例出典〕

(1) 井伏鱒二『黒い雨』新潮文庫、一九八〇

柯毅文・顔景鎮訳『黒雨』湖南人民出版社、一九八二

(2) 井上靖『夜の声』新潮文庫、一九八一 文藻若訳『夜声』上海訳文出版社一九八〇

※(3) 有吉佐和子『海暗』文庫本

(4) 黒岩重吾『背徳のメス』新潮文庫、一九八二

(5) 羅廣斌・楊益言『紅岩』中国青年出版社、一九七七

立間祥介訳『紅岩』、『現代中国文学10 羅廣斌・楊益言』河出書房新社、一九七〇

(6) 老舍『駱駝祥子』人民文学出版社、一九七九

立間祥介訳『駱駝祥子』岩波文庫、一九八三

(7) 丁玲『太陽照在桑乾河上』人民文学出版社、一九五五

高品穠訳『太陽は桑乾河を照らす』、『現代中国文学5・丁玲・沈從文』河出書房新社、一九七〇

(8) 夏目漱石『三四郎』新潮文庫、一九六二

吳樹文訳『三四郎』上海訳文出版社、一九八三

(9) 李英儒『野火春風斗古城』人民文学出版社、一九七七

立間祥介訳『野火と春風は古城に闘う』、『中国現代文学選集12』平凡社、一九六一

上記の中で、※のついた作品は『日本語・中国語対照表現用例集1』（一九七七、日本語と中国語対照研究会編）による。また出自を記していない文は筆者の作例である。

〔参考文献〕

1、国広哲弥編『ことばの意味3』、一九八二年、平凡社選書

2、日本語教育学会編『日本語教育事典』、一九八二年、大修館書店

3、森山卓郎『動詞のアスペクトチュアルな素性について』、『待兼山論叢』第十七号、一九八三年、大阪大学文学会

4、吉川武時『現代日本語動詞のアスペクトの研究』、一九七三年（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』、一九七六年、むぎ書房刊）

5、久野暉『日本文法研究』、一九七三年、大修館書店

6、木村英樹『中国語』、『講座日本語学11』、一九八二年、明治書院

7、大河内康憲『中国語の受身』、『講座日本語学10』、一九八二年、明治書院

8、荒川清秀『中国語動詞に見られるいくつかのカテゴリ』、『愛知大学文学論叢』第六十七輯、一九八二年、愛知大学文学会